



TITLE:

<第1編 タイ国> 【事例2】 Lefferts /
東北タイ / Dong Phong 村

AUTHOR(S):

福井, 捷朗

CITATION:

福井, 捷朗. <第1編 タイ国> 【事例2】 Lefferts / 東北タイ / Dong Phong 村. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 5: 7-9

ISSUE DATE:

1994-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187464>

RIGHT:

【事例2】Lefferts／東北タイ／Dong Phong 村

1. 調査

対象

東北タイ、Khon Kaen 県 Dong Phong 村(以下 DP村と略す。1972年人口 701人)

調査者

Hollace Leedom Lefferts, Jr.

調査期間

1970-1972

報告

Lefferts, Jr., Hollace Leedom. *Baan Dong Phong: Land Tenure and Social Organization in a Northeastern Thai Village*. A doctoral thesis submitted to University of Colorado. 1974.

2. 対象の概要

地域の概況

「【事例1】福井ほか／東北タイ／ドンデーン村」を参照のこと。

対象集団の概要

DP 村は、Khon Kaen 市の東、約10^{km}。東北タイを東流するメコーン川の支流チー川の最大の支流、Nam Phong 川の右岸にある。氾濫原に天水依存水田があるが、近年、Nam Phong Dam 建設により灌漑されるようになった。1923年以前には8家族が住むだけであったが、同年に南方30^{km} から29家族が移住し、実質的な村の創設となった。

3. 調査項目と方法

人口

系図一家族史調査によって、80人の女性を祖先とする1,683人を、332の2世代単位に分け、出生、死亡、移動、相続、結婚暦を推計。

土地資源

航空写真に基づいて、過去50年間の土地所有・利用単位168を識別し、それぞれについて所有・利用に至る経緯を調査。

4. 主たる結論

主たる調査結果を、次の表にまとめる。

	村人口 (人)	期間中の			NRR	水田面積(ライ)		
		人口増加 (%/年)	移入者数 (人)	移出者数 (人)		耕作面積	労働力 1人当	人口 1人当
1923	62		177	21				
1927	283	1.65	103	72	2.75	947		3.34
1937	405	1.56	52	82	2.19	1242	9.7	3.06
1947	473	2.30	85	148	3.29	1435	6.3	3.03
1957	594	0.16	85	187	2.12	1513	5.2	2.54
1967	631	2.12	50	78	2.93	1513 (1466)*	5.0	2.39
1972	701					1622 (1495)*	5.3	2.31

* ()内は、借地を含まない場合の面積

表から明らかなように、この村は1930年代までは開拓移入による人口受容村であり、その後は人口排出村である。この転換は、一人当たり水田面積の定常化とほぼ時期的に一致する。前期の在村人口は主として移動により、後期の在村人口と移動量は主として自然人口増加率によって決定されている。最近5年間については、稲作以外の生業の影響がある。

初期の大水田面積は、労働力、需要を超えるもので、人口増加に伴って最適規模となった。この土地、労働分配の最適化は、相続慣行を前提とした世帯構造のダイナミックス(世帯間相互扶助と家族周期の関係)を媒介として達成されている。

5. コメント

DP 村と【事例 1】の DD 村とは、直線距離にして 20*_{๑๕}以下しか離れておらず、ともに Khon Kaen 市の郊外にある。二つの村は、多くの点で共通の特徴を示している。すなわち、上の表に示された点に関してだけでも、ともに *hana di* による開拓村であり、人口増加率と移入・移出の動向と、一人当たり水田面積の消長との関係は、まったくといってよいほど類似している。また、近親世帯間相互扶助と家族周期の関係、それらの米生産・消費における機能についても、ほぼ同じ見解である。このような一致あるいは類似は、少なくともこれらの諸点に関しては、それらが Khon Kaen 周辺のラーオ社会においてかなり一般的であることを示唆する。

しかし、二つの村の間の相違点もある。DP 村の方がより Khon Kaen 市の通勤圏に入ったのが早いと思われるし、また、灌漑が始まっている。前者における 1970 年代以降の移出者数の低下、一人当たり水田面積の低下などが、それを物語っている。

興味あることは、DP 村でもいまだ無灌漑で、避妊も行われていなかった 1950 年代後半から 1960 年代にかけて、出生力が低下していることである。DD 村でも、第 2 次大戦後のしばらくの間、出生率が低下したかにみえたが、その理由は明らかでなかった。両村でともに、水田面積の拡大が止み、移出者数が最大となる時期、出生力が低下したとすれば、在村人口増加の負のフィードバックがあったことになる。

(福井捷朗記)